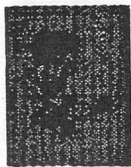


鶴見俊輔の



新潮社

2800円

☆戦争が遺したものの一鶴見俊輔に戦後世代が聞く
鶴見俊輔・上野千鶴子
・小熊英二著

鶴見俊輔の、おもに戦争体験を中心に、上野と小熊が聞き手となって進められる座談形式。この2人の「つつこみ」がかなり厳しく、鶴見も正面からそれに答えていて、読み応えのある内容に

っている。

学者の座談にありがちな、業界専門用語が飛び交う、というものでないのもいい。まあ互いの専門分野が違うからにすぎないかもしれないけれど、ごく個人的でありながら、広く拡がる内容を含んだ戦中戦後史で。それを聞き手がまことにうまくひきだしている。

予備知識がないとわかりづらい部分もないではないし（丸山眞男とか竹内好などの個人名はほぼ説明抜きで出てくるし、

べ平連もそう。このへんはもう知らない、読んだこともない人もいるという発想はないのか？）、
「従軍慰安婦」問題、それに関連して「アジア女性基金」に対する憂鬱など、鶴見の発言にひっかかるものもないではない。しかし、むしろそれもすべて含めて、ひとつの時代を生きた人の希有なほど正直な証言であり、副題にある通り、「戦後」生まれが「戦中」「戦後」を知り、考えるには、格好の一冊といえる。（涼）